

## 図書館長に就任して

金 原 理

図書館には細川家の旧蔵で現在の永青文庫の蔵書のうちの、文学書と古文書の一部が寄託されている。これらの文献については、かつて法文学部に在籍された森田誠一教授を中心とした方々の手によって詳細な目録が編まれ、閲覧の便に供されていることは周知の通りである。そしてこの永青文庫は図書館の地下の二層の、そのために詭えられた特別室に納められている。

これらの古文書が本学に寄託される前は、JR熊本駅近くの細川家の廟と森鷗外の小説で有名な阿部一族の墓のある北岡自然公園の入口近くにある土蔵の中にあった。

もうかれこれ三十数年前にもなろうか、大学院に進学してまもなく、指導教官に伴われてここまで本を見せていただきに通ったことがある。蔵の開閉は細川家ゆかりの方一八代から出てこられていた一の手によって行われ、何うことをあらかじめ連絡しておく、わざわざそのために出向いてこられ、重い扉を開けて待っていて下さった。土蔵の中から見たい本の入っている木箱を運びだし、そこから本を取り出して必要事項を記録するために鉛筆を走らせる。疲れて来ると手をとめて、眼前の写本一江戸の初め頃に写された本がほとんどだが一に思いを馳せる。とくに『源氏物語』の写本に幾種類か存在するのだが、美しい蝶でんのちりばめられた漆の深い艶のある箱に大切に納められていて、艶があって腰のしっかりした鳥の子紙にのびやかな字で写されている本一これは俗に嫁入り本と称され、実際に興入れの折に姫君が持参した一を前にして、興入れした若い婦人たちはあの『更級日記』の作者、菅原なかつ孝標の娘のように「一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちのうちふしてひき出でつつ見るこち、後の位も何にかはせむ」<源氏物語を一の巻から読み始めて、たった一人で几帳の内に伏せて、はこから一冊ずつ取り出しては読む気持ち、この幸福感の前には後の位も何になろう。>と、この写本を手にとって一心に読み耽ったのだらうかなどと数世紀隔った昔に遡って、彼らと共通の時間の中に意識を遊ばせたりもした。その日の調査を終えて本を木箱に納め蔵に戻すと、朝お逢いした管理の責任者が来られて扉を閉ざし、挨拶を交わして一日を終える。日が西に傾きかける頃である。かつてはこうして文庫を拝見したものだ。

私は二十数年前こちらに赴任したが、今の図書館が

建てられたのはそのじき後で、寄託された永青文庫や大学所蔵の阿蘇家文書などの貴重書は地下の特別な部屋に納められ、現在に到っている。

このたびはからずも図書館長をお引受けすることになった。館長の役目はこの永青文庫の本をはじめ図書館収蔵の図書の番をするものだと無邪気にも信じ込んでいたのである。

しかしこの考えがいかにもずれたものだということを就任後、日ならずして悟った。図書館の主要な仕事はコンピューターを駆使した情報の交換と提供にあるということ、遅ればせながら知ったのである。

たしかにコンピューターを利用すれば新幹線や飛行機でどんなに早く動こうとも、生身の人間が物理的に移動するよりずっと早く、まさに瞬時にして、国内はもとより国外の図書館の書庫にまで入り込んで、必要な文献を捜し出し、場合によってはその内容についてもある程度の情報を入手することもできる。あるいはもっとも新しい研究の情報をいち早く自らの研究室の端末器の画面上に呼び出すことだってできるのである。

すぐれた文献を収蔵してゆくという仕事と同時に、図書館の主要な役目がこうしたサービス業にあるとすれば、それはすばらしいことだしまことに愉快なことではないか。

館長に就任して三箇月、どうやら仕事にも慣れた。とは言え到らざるところも多いと思う。どうか図書館のためにご援助とご鞭撻をせつにお願いしたい。

(きんばら ただし 図書館長)

